

# 『サロメ』を読む

荒井良雄

ワイルドといえば、すぐに『サロメ』を思い浮かべる人が多い。『サロメ』はワイルドの代表作であり、世紀末文学を象徴する傑作とされている。それは、丁度、シェイクスピアといえば、すぐに『ハムレット』を思い浮かべ、『ハムレット』がシェイクスピアの代表作であり、エリザベス朝文学を代表する名作であるのと似た関係にある。だが、『サロメ』は戯曲でありながら、『ハムレット』のように舞台で絶えず上演されてこなかった。いや、むしろ上演されるのが稀れなくらいだった。その原因は何か？戯曲としての欠陥があるからなのだろうか？

第一の理由は、「一晩の芝居としては短かすぎる」せいかも知れない。しかし、古くはギリシア悲劇の『オイデプス王』、十八世紀ではシェリダンの『批評家』、近代劇ではストリンダベリーの『令嬢ジュリー』、現代劇ではラティガンの『ブラウニング版』など、いづれも一幕物の長さだが、舞台では人気があって、よく上演されている。上演台本としての魅力があれば、上演されないはずはないから、短かいのが原因で上演されないとは思えない。

振り返ってみると、『サロメ』の上演は初演のときから物議をかもしている。1892年のサラ・ベルナル主演による初演は、リハーサル段階で上演が禁止された。フランスにおける初演は1896年のループル座で、そのあとはドイツにおける1902年のラインハルト演出が注目されたくらいだ。したがって、イギリス演劇史に残るような『サロメ』の上演はなかったといっている。『サロメ』の上演の決定版は、劇としてよりも、オペラとしての上演であって、その功績はリヒャルト・シュトラウスが1905年に発表した歌劇台本にある。『サロメ』は、それ以来、今日まで、オペラの主要なレパートリーになっていて、毎年上演を繰り返し、レコードも数多く出ている。

1980年10月4日、NHKホールにおけるウィーン国立歌劇場の東京公演で『サロメ』を見て、私は「七枚のペールの踊り」に、このドラマの最大のポイントがあったことに気付いた。この踊りがなければ、『サロメ』のドラマは成立しないのである。ところが、ワイルドのテキストは、「サロメは七枚のペールの踊りをおどる」という、たった一行のト書で片づけている。シェイクスピアなら、このクライマックス場面を、華麗なブランク・パースを駆使して、優に一幕をかけて描写したところだろう。この踊りによって、ヘロデ王がサロメに魅惑され、サロメの驚くべき要求を受け入れるわけだが、テキストには、ヘロデ

王の心の動きも、サロメの具体的な踊り方も、舞踊音楽も、なにも書かれていないのだから、これはト書として不備であり、上演台本としては、そこが最大の欠陥になる。次に問題になるのは、サロメという悲劇の女主人公の性格に発展が見られない点だ。オイデプス王、ハムレット、マクベス、オセロー、リア王をはじめとする悲劇の主人公たちは、最後に必ず自己発見があり、悟りに近い心境に達している。ところが、サロメは終始一貫してヨカナンを求めるだけで、最後に生首にキスをして目的をとげたところで幕になる。これは、芸術のための芸術、美のための美を主張したワイルドらしい女主人公の設定であって、道徳的解釈が殆んど入り込む余地がないほど完璧に唯美主義的な結末である。『サロメ』の構造は、ギリシア悲劇的であり、アリストテレスが『詩学』でいっている「恐怖」と「哀れみ」も、結末からは感じとれるが、サロメの性格上の発展はないとみていいのではないか。

サロメの「愛の神秘は、死の神秘より遙かに大きいよ」というセリフのあとで、星が消え、月が雲に隠れ、舞台が暗くなるのをきっかけにして、サロメが生首にキスすることの空虚感を悟り、そのあとでいう「恋は苦い味がするというわね」というセリフに、愛の神秘とその空しさを見出す演出が可能かも知れない。愛の神秘は生身の肉体あってのもので、死んだヨカナンの生首には、精神も、生命も、愛情も宿っていないのだから、その生首に向って「お前の口にキスをしたのよ」と語りかけるサロメの自己陶酔的な最後のセリフに、空しさの響きを持たせる演出は可能であろう。そうすれば、サロメもギリシア悲劇やシェイクスピア悲劇の主人公たちと同じような悲劇の主人公の仲間入りができそうである。しかし、これは少々無理な読み込みである。サロメが自分の欲望を達成して恍惚となっているところで殺される演出こそ、最もワイルド的ではないだろうか？

ワイルドは、『獄中記』の中で、『サロメ』を「音楽的作品」だといっている。ワイルド自身が音楽劇を目ざして、散文詩のように美しい小品として『サロメ』を書いているのだから、『サロメ』に一番ふさわしい上演は、やはりシュトラウスのオペラだということになる。ただ残念なのは、ワイルドが存命中に、シュトラウスのオペラ版の初演に立ち合うことができなかった点である。

ウィーン国立歌劇場の見事な舞台に刺激されて、私は以上のようなことを考えながら、『サロメ』を再読してみた次第である。(発表のときは学習院大学教授、現在は駒沢大学教授)